

当報告の内容は著者の著作物です。

第4回（通算第10回）

基幹研究「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」公開セミナー

平成23年11月26日（土）13:00-18:00 AA研306号室

## 帰還移民の社会空間

——アラブ性とアフリカ性をめぐるオマーン人の共同性と境界意識——

大川真由子(AA研研究機関研究員)

### <要旨>

本発表は、19世紀前半から20世紀半ばにかけて、オマーンの植民地活動に伴って東アフリカのザンジバルに移住したのち、1970年代に帰還したオマーン人（便宜上、アフリカ系オマーン人と呼ぶ）の社会空間を民族的共同性の観点から明らかにすることを目的としている。

社会空間とは、人びとの日常的実践の場面において抑圧や交渉、葛藤などの相互行為によって構築される場であり、異質なものが共存し重層的な関係性から生成される。社会空間論においてはこれまでも異階層・異民族間アイデンティティの拮抗やせめぎあいに着目が置かれる一方で、最近では共同性を編成していく過程にも注目が集まりつつある。ただし構造的弱者による防衛的な共同性の形成が中心的事例であり、支配者や中間層に対してはこれまで大きな関心が払われることはなかった。

発表者が研究対象とするアフリカ系オマーン人は、本国の植民地活動に伴って支配者層として移住したものの、移住先がのちに英国保護領化されたことで、支配者層から中間層へ転落したという意味では、支配者／被支配者という枠組におさまりきらない存在である。さらに、数世代にわたる移民生活のなかで現地民と通婚したことから、多くがアラブとスワヒリ（アフリカ人）との混血となり、母語もアラビア語からスワヒリ語に変化した点も、彼らのアイデンティティが構築されるうえでの争点となる。

以上の点をふまえ、本発表では移住先と帰還先双方においてアフリカ系オマーン人がいかにアラブ性とアフリカ性を編成しているのかに関する5つの事例を紹介した。たとえば、移住先では現地民のスワヒリ（スンナ派ムスリム）との通婚を含めた友好関係を築いたとし、民族を越えた「ザンジバル人」という共同性を創出した。ここではスワヒリのイスラーム性やアラブ文明の享受が共同性の根拠となっている。その一方でアラブ協会を設立し、アラビア語新聞を発刊したり、エジプトなどのアラブ・イスラーム世界との連帯を強めるような動きもみられた。これは対英国という枠組において、支配者層への抵抗としてアラブ性が強調された。また帰還後も出身地アフリカへの支援活動をおこなったり、アフリカ系オマーン人同士で婚姻するという傾向がみられる一方で、彼らのもつアフリカ性（混血であることやスワヒリ語の知識）ゆえにオマーン生まれのオマーン人（ネイティブ・オマーン人）からの偏見や侮蔑に対して、系譜を利用してアラブ性を主張する。父系を重視するアラブの系譜上、アフリカの血が流れようと父方にアラブをたどれることができればアラブ性を主張できるからである。

こうした事例からわかるのは、アイデンティティの源としては一貫してアラブ性を重視する一方で、アフリカ性への親密性と侮蔑が混在しているということである。こうした異質性の共存は社会空間の特徴のひとつでもあるが、どのような条件のもとで何を留保しながら民族的共同性を編成しているのかを詳しくみていくと、2つのことがあきらかになる。第一に言説レベルと実践レベルの乖離である。英国／アラブ／スワヒリという三者関係において、言説レベルではアラブ性を重視するのに対し、実践レベルでは、中間層としてスワヒリを囲い込み「ザンジバル人」という共同性を構築することで支配者層に対抗している。これに対し、ネイティブ・オマーン人／アフリカ系オマーン人という二者関係において、言説レベルでは（系譜を用いて）アラブ性のみを主張してアフリカ性は否定するのに対し、実践レベルではアフリカ性との共存（出身地への支援活動やアフリカ系オマーン人同士の婚姻選好）がみられるのである。

第二に、アラブ性とアフリカ性をめぐってはアフリカ系オマーン人とネイティブ・オマーン人のあいだで認識の乖離がみられる。アフリカ系にとってアフリカ性はスワヒリ／ズヌージュ（アラブ文明を享受していない非ムスリムの黒人）の区別が重要であるのに対し、ネイティブ・オマーン人にとってこうした区別は考慮されない。アラブ性に関しては、アフリカ系にとっては系譜に基づいて主張されるのに対し、ネイティブ・オマーン人にとっては言語・生活様式を含む民族文化として理解されるのである。

このようにコロニアルな帰還移民であるアフリカ系オマーン人を通時的に分析することによって、支配者層あるいは中間層からみた民族的共同性および、複数のアラブ性とアフリカ性から構成される重層的な社会空間であることを明らかにした。